

## 第14回世界老年学協会主催国際大会に出席して

前田 信雄

### 1. はじめに

世界老年学協会 (International Association of Gerontology) は、4年ごとに国際大会 (International Congress) を開催している。1989年6月にアカプルコで開かれた第14回大会は、医学、自然科学、社会科学、あるいは心理学など、幅広い学問分野を含む学際的な大会である。

最近の国際大会の開催年と開催地とを下記に記し、とくに1993年のブダペスト大会には、日本からもまた多くの参加があるように希望するものである。

第11回	1977年7月	東京都
第12回	1981年7月	ハンブルグ
第13回	1985年7月	ニューヨーク
第14回	1989年6月	アカプルコ
.....		
第15回	1993年(予定)	ブダペスト
第16回	1997年(予定)	アデレード (オーストラリア)

### 2. 世界老年学協会のあらまし

世界老年学協会 (以下では IAG と略称) は、1950年に創設された。現在その協会本部は、米国のノースカロライナ、デューク大学医学セン

ターに設置されている。1989年現在の学会長 (President) は、エwald W. ブッス (Prof. Ewald W. Busse, M. D.) である。本部といっても、常勤職員はおらず、10人のボランティア的な人によって運営されている。国際大会の開催は、その国の事務局に委託する。

世界老年学協会は、ヨーロッパやアメリカ、アジア・オセアニアなどの地域学会の連合体でもある。今から39年前、ベルギーのリージュで創設されたとき以来、この協会は医学とそれ以外の学問分野との交流と一緒の活動をモットーにしてきた。高齢者・高齢問題にかかわる学問のすべての分野をカバーすることを学会の目的にしている。大別すると、医師、保健従事者、医師以外の職種、社会・行動科学研究者、生物学・臨床研究者などの参加が多い。

IAG は、研究発表・交流のほか、老年学の教育・研修にも援助するが、中心的なテーマとしては、退職、住宅と環境、女性の高齢問題、農村老人、長期ケアおよび健康と栄養などである。一般の医学会や社会学会とはひと味違うユニークな学会である。先駆的な研究にたいしては、毎年「サンドス国際研究賞」が授与される。学会本部予算は、1987年度約25万ドル (米) であった<sup>1)</sup>。

### 3. 第14回老年学国際大会

第14回老年学国際大会は、メキシコの老年学会 (Sociedad de Geriatria y Gerontologia de México) をホストにして開催。学会長は S. Bravo, 学会事務責任者は, Joaquin González Aragón, M. D. であった。

従来国際大会では、メインテーマに沿って全体集会がもたれていた。いわゆる総会シンポジウムがあったが、今回ではそれはなく、いきなり300前後のシンポや円卓討論をするというスケジュールであった。分野としては、生物学、臨床医学、行動科学・社会科学、社会調査・計画と実践、学際分野の5つの分科会的なものにわかれた。

そのうち、私は行動科学・社会科学部門の招請シンポジウム「高齢社会の経済問題」(Economic Aspects of Aging) の司会をした。私と副司会のウィリアム・バーチェル (ミシガン大学社会福祉学部) とが、スピーカー選びをしたが、スウェーデンからグンナー・ヴェンストローム (スウェーデン厚生省計画局, 医師) と日本の丸尾直美教授 (中央大学), そして中国からは、人民大学の Canping 教授 (人口学) を呼ぶことにきめた。実際の演者は、米国から (バーチェル) とスウェーデンと日本からの3人であった。

大会シンポの裏話になるが、このシンポの依頼を受けたのは1年半ほど前であった。学会事務局からの助言としては、国際大会のスローガンである「新しい社会における高齢」(The Old in a New World) に示されるように、いわゆる先進国以外からの招待があるとよいと示唆されてはいた。

しかし、その人選は楽ではなかった。事務局からは、「東欧諸国からも1人」と書いてはきていたが、その具体的な候補者名はあげてこないし、こちらではどのようにして採してよいものやら思案だけに明け暮れした。

結局は、日本の同学の人たちからの助言を随時得てスピーカーをしばり込んでいった。実際にも、いろいろな人とくに友人らに「誰かいないか」と声をかけ、情報をもらい、実際にはその人らに依頼しなかった例も少なくない。この「人選」は結構気配りを要する仕事であった。

司会が人選をせよといわれても、その人の参加旅費をこちらが保障はできない。中国からの参加予定者からは、旅費や登録費用を出してほしいと私に依頼があった。日本国内の学会関係者にどこか出せるところがないかどうか相談したものの、その実現は到底無理だった。

スピーカーの決定は、司会が勝手にできるものではない。国際大会本部に申請をして、後にその承認を得て、司会の方からそれを通知する。本来なら本部からスピーカーに知らせるべきことだろうが、住所がわからないとかで司会にその通知の役を押しつけられた。些細なことを書いているが、実際にこのようなことでの手紙のやりとりは煩雑であった。多忙な方、よい要領での仕事にしか興味ない方には、おすすめできない雑務である。司会は、こういったことよりも、何よりもテーマとその内容あるいは視点などをスピーカーとの間でやりとりして準備しないといけない。

さいわいというか、私のこの国際大会への出席は4回目であった。能率や要領の通用しない国際的な仕事も必要だと考えて、「ここは忍耐」とばかりに、最後まで手紙のやりとりを続けてみた。メキシコの大会本部内でもたもたがあっ

たらし、返事は遅れるし、一体自分のシンポが何日になるやらもわからず、本当にひと月前頃まで気をもんだ学会であった。東京都老人総合研究所社会学部のリーダーたちはこの学会には不参加だった。

実は初稿を出した後に、メキシコの事務局から詳しい学会のまとめが届いた。それによると、参加人員総数は3千4百人、うち南米全体から587人、米国570人、イタリー300人、メキシコ277人、そして日本人は242人であった。日本からの参加が顕著になってきている。全体としては、この学会でも、発表のための参加という傾向が強まっている。各会場での演者の総数は1,500人に達した。数年前、この14回大会にはメキシコと英国が名乗りをあげ、21対20という1票差でできた大会であった。いろいろな意味で困難な状況のなかにおいて、国際学会をお世話したメキシコの学会事務局の労を多としたいものである。

#### 4. 「高齢社会の経済問題」シンポジウム

ここで発表されたことのトピックスをとり上げてみたい。私は21世紀における高齢社会に予想される各国の経済水準や労働力構成の大きな変化は、高齢者を支える社会保障財政の基盤を弱くするのではないかと問題提起をした。そして、いうまでもなく社会保障へのニーズは拡大する。この矛盾をどう解決できるか。各国の論議や提案、演者の考え方を問うというシンポジウムにした。

米国のバーチェルは、直接これに答えはしなかったが、高齢社会における経済問題の解決のためにも、人々の家族とか社会についての価値

観の違いや変化が重要になろうという指摘であった。スウェーデンの演者は、1988年に議会を通過した新事業つまり在宅老人のケアや住宅の総合的保障政策をのべ、全体として次の世紀についての楽観的な見通しを開陳した。日本からの丸尾直美氏も、豊富な経済社会的データを駆使して、公私混合の経済制度と運営による解決の政策を発表した。中国からの演者は特別発言の形態をとり、中国経済の発展こそが高齢者問題の鍵だという主張を明解にしてゆずらず、「1人っ子政策」に伴う社会的問題を重視すべきでないかという私の質問には批判的であった。

今回の大会の内容については、既に東京都老人総合研究所社会学部社会研究室の直井道子室長(当時)が詳しく報告している<sup>2)</sup>。また、1989年の日本老年社会科学会(於名古屋)においても、同朋大学の大間知千代氏からこの大会についての報告がなされた<sup>3)</sup>。

大会のなかで最も多い報告は自由口頭発表(Paper Sessions)とポスター発表(Poster Sessions)である。全体としての印象では、今回は老人ケアや高齢者の健康や傷病についての国際比較研究が多かったことである。その種の国際共同研究にたいして、とくに米国では多くの研究補助が出され、同時に各国内の関心が広がっていることを示している。それも、米国と北欧といった比較だけでなく、東と西、南と北、先進国と途上国、二国間や多数国間といった多様な比較研究である。疫学的研究もあれば、一部臨床的な共同研究もある。従来からの社会的なサポートや老人観や家族社会学的比較研究まで多彩であった。

その研究内容のレベルは当然まちまちではあったが、各国とも自国のとるべき高齢者政策のあるべき姿、「青い鳥」の探索に近い努力と私

には思えたのだが、もちろんもっと別の視点、つまり各国共通の課題、同一のトレンドの確認という研究もあったのはいうまでもない。「何のための国際比較か」というテーマでの円卓討論も興味深かった。出席者は少なかったが、私も別に発表させてもらった「長期ケアの財政問題」は、これからも検討を深めるべきテーマであろう。

ブラジルの日系ブラジル人と日本の日本人との成人病発症の推移の比較という発表は興味深かったが、全体としてみると、南米からの報告あるいはアジアの開発途上国からの発表が少なかったのは残念であった。また、今までの大会では、現地の施設の研修ツアーなどが組まれるのであるが、今回はそれもゼロであった。

## 5. おわりに

4年後のブダペストには、ヨーロッパ各国からの参加者が多いと予想される。とくに、臨床関係や予防老年医学 (Preventive Geriatrics) あるいは地域計画専門の人たちの発表も予想される。北欧諸国では、高齢者と若い世代とが一緒になった新しい街づくりが進んでいる。地域

ケアの実践、デイケアや訪問サービスあるいはホームヘルプ事業などの報告を聞きたいものである。

日本の老年社会学関係者の報告内容とレベルは他にくらべ見劣りは全くしないし、その準備とデータあるいはプレゼンテーションの仕方は進歩した。しかし、質疑応答となると下手である。その解決のためには、結局は、発表と同時に、日頃の外国語による討論の機会を多くすることが大切である。

第4回アジア・オセアニア老年学大会が、1991年10月31日から11月1日まで、横浜市において開かれる。社会保障関係者の多くの発表と参加を得たいものである。

## 注

- 1) The American Association for International Aging, An International Directory of Organizations in Aging, pp. 8~9, 1988年
- 2) 直井道子, 国際老年学会・メキシコ会議報告, 社会福祉研究, 第46号 1989年
- 3) 大間知千代, メキシコ・アカプルコ第14回国際老年学会大会に出席した印象, 日本老年社会科学会第31回大会報告要旨集106頁, 1989年11月  
(まえだ のぶお 札幌医科大学教授)